

國學院大學學術情報リポジトリ

報告二 渋谷の落書きとアートのあいだ： サステナブルな活動から見えるアート

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 傍嶋, 賢 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001518

《報告二》 渋谷の落書きとアートのあいだ

——サステナブルな活動から見えるアート——

傍嶋 賢

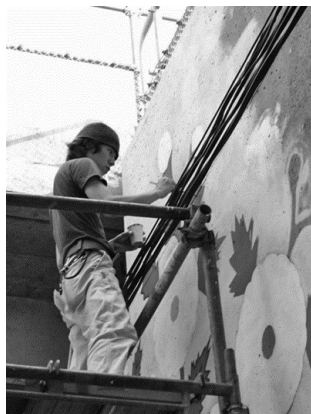
【傍嶋】一般社団法人CLEAN&ARTの代表理事をしております傍嶋です。本日はよろしくお願いいたします。

これまでの活動と経緯

まずは、私の自己紹介からさせていただきます。私は平成十七(二〇〇五)年に東京藝術大学大学院壁画第一研究室を修了しました。その後、いろいろな自治体や東京藝大、J R東日本などと共同してプロジェクトを行なっています。

平成十五(二〇〇三)年、大学院在学中に参画した「取手アートプロジェクト」〔平成十一(一九九九)年に始まった取手市、市民、東京藝術大学の三者が取手市をフィールドにして、芸術表現を通じた新しい価値観の創造を目指す活動。<https://toride-ap.gr.jp/>〕では、はじめてパブリックの中で壁画を描く機会がございました。それまでは、美術館やギャラリーなどで展示する機会はあったのですが、「取手アートプロジェクト」は、はじめて壁画を描いて、市民や、その「まち」に住む高校生などと一緒に共同制作を行なった活動となったわけです【写真1】。





【写真1】 取手アートプロジェクトの制作風景
(平成15年9月13日、傍嶋賢氏提供)

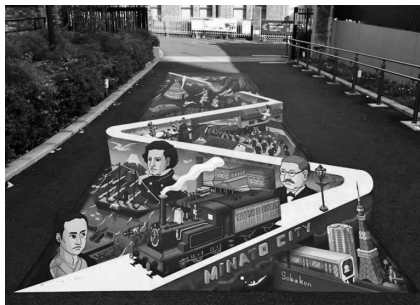
という路線がありまして、上野から取手までの沿線で行なわれるアートプログラムによく参加しています。たとえば、北千住駅から取手駅までの十二駅で待合室をラッピングしたり、JR東日本で回収された引き取り手のない忘れ物の傘のアートワークショップを行なったりしました。このワークショップは大体十五年以上前からやっていまして、延べ本数でおよそ一万本使っています。引き取り手のないビニール傘はJRのほうで処分してしまうので、それをお願い受けて、上野から取手までの八自治体でイベントを行ない、毎年一千本ぐらいを使ってワークショップを実施しているわけです。その中で、東京藝大の学生に絵をライブペイントしてもらったり、音楽科の卒業生などと呼んで音楽ライブを行なったりもしました。以上のように、私の活動は、「まちとアート」をテーマに展開してきています。

また、平成二十二(二〇一〇)年からは、隔年で東京の荒川区内の五か所で壁画を描く活動も行ないました【写真2】。活動のきっかけは、落書きの問題など、地域の環境が悪いので壁画を描いてほしいという依頼があったことでした。その後、落書きのないところにもどんどんと壁画が増えてきて、環境はとてよくなっております。

続いて、私の仕事について紹介いたします。先ほどの経験や、行政、市民の方々と触れ合う中で、パブリックアートを仕事にできるのではないかと思い、大学院修了後、アルバイトをしつつ、いろいろな「まち」のアートプロジェクトなどに携わりながら、少しずつ仕事を得て今に至ります。主な活動場所は、東京藝大の壁画科の大学院があり、現在も住んでいる茨城県取手市(茨城県南部、千葉県に隣接する都市)です。そこにはJR常磐線(上野駅を起点として日暮里・取手・土浦・水戸・日立・いわきを経由し、宮城県の東北本線岩沼駅に至る路線)



【写真2】 荒川区内における壁画
(平成24年10月24日、傍嶋賢氏提供)

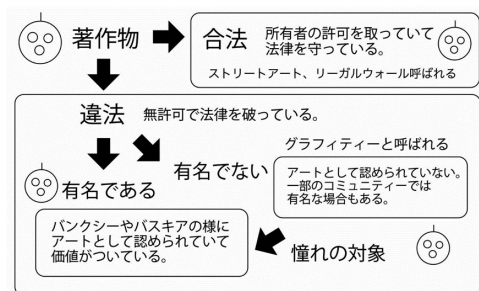


【写真3】 港区郷土資料館路上のトリックアート
(令和2年10月26日、傍嶋賢氏提供)

ほかにも、いろいろなアートワークを行なっています。たとえば、港区郷土資料館の路上では【写真3】のようなトリックアート(実物の窓や扉があるように描かれた壁画など、視覚における錯覚を利用した作品)を描いたり、個人的なアートワークとして一昨年からパリ、ニューヨーク、ロンドンなど各国を回ったアートプログラム(FOCUS Art Fair)も実施しております。その際に展示した作品の説明をしますと、世界全ての国旗を凹凸のある素材に描き、斜めから見ると全然どの国ものか分からないのですが、正面から見るとちゃんと国旗に見えるというもので、見た人に自分の国を探してもらって交流を図るというアート作品です。これを日本で発表しても、日本人が多いので、なかなかいろいろな国の方と会う機会はないのですが、パリ、ニューヨーク、ロンドンなどには様々な国の方がいて、自分の国を探して楽しめたり、他国のことを考えたりするきっかけになる作品となっています。

CLEAN & ARTの展開

今回の本題ですが、一般社団法人CLEAN & ARTの経緯と流れとについて説明させていただきます。
まず、なぜ渋谷を活動場所を選んだのかについてです。そもそも私は荒川区で壁画を描いていたのですが、荒川区は落書きがそこまで多くなく、落書きのないところにも壁画を描くようになりました。そこで、東京都内でもっと大変な思いをしている場所はないだろうかと思ひ、平成二十九(二〇一七)年から都内を調査



【図1】落書きの概念図
(傍嶋賢氏作成)

しました。いろいろなところを回り、特にその当時一番落書きが多かったのが渋谷区でした。最初は、渋谷区に落書きが多いのは、「まちの人が寛容な、ストリートアートのまちなのだろうな」と思い、「誰も困っていないのであれば、落書きを消す必要もない」と思っていました。しかし、渋谷の「まち」の人々や行政にヒアリングをしたところ、お店の人がとても怒っていたり、見つけたら懲らしめてやるというような人に出会ったりするなど、想像以上に「まち」の多くの人が困っているということに気がついたのです。外から見た「まち」と、「まち」の中にいる人たちの感覚には差があるのではないかと考えはじめました。

ここで、そもそも「落書きとは何なのか」ということを皆さんと共有しておきたいと思います。簡単にいいますと、落書きとは第三者にとっては無価値なもので、損益を招く著作物ということになります。

【図1】は私が作った概念図です。私が思うに、あなたが絵を描いても、それは芸術であり、アートだと思っています。上手い・下手、子ども・お年寄りにかかわらず、著作物であるといえます。ただし、著作物はそれが合法か違法かということとで分かれます。許可を取っていないものや、人によっては非常に不快なものが落書きというものになります。

落書きがあるデメリットとしては、犯罪が増えるということがあります。落書きのあるところは人目につかないところが多く、落書きによって環境が悪化したり、ごみが増えやすくなったり、新たな落書きが増加したりするなどの悪影響があります。実際に、海外では「落書きのあるところには行かないでくれ」という

注意喚起がされているところもありますので、落書きのあるところは基本的に危ない場所だといえます。

続いて、CLEAN&ARTを設立した経緯についてお話をします。渋谷で何か活動をしようとしたときに、はじめに参加したのが認定NPO法人グリーンバード(誰でも自由に参加することのできる「まち」のゴミ拾い活動団体)の代官山チームです。この団体はゴミ拾いをするのですが、それが終わった後にタウンミーティングがありまして、そこで落書き対策をしたいというお話をしました。そして、その中の有志四名で平成三十(二〇一八)年にCLEAN&ARTを立ち上げ、翌年(平成三十一(二〇一九)年には一般社団法人CLEAN&ARTを設立することになります。

平成三十(二〇一八)年から令和三(二〇二二)年まで、ボランティアベースで月一回から二回ほど活動し、計二十八回、延べ四百七十三名ほどが参加しました。令和三(二〇二二)年以降は、渋谷区の受託事業である「渋谷区落書き対策プロジェクト」(令和三(二〇二二)年度から令和五(二〇二三)年度まで実施)として、通報のあった渋谷区内の落書きの消去を行なっております。はじめの三年間のボランティアベースでの活動もとてもすばらしかったのですが、やはりそれだけでは全然問題が解決せず、落書きの増える量の方が多い状態となっていたのです。しかし、渋谷区の受託事業となった令和三(二〇二二)年以降は、落書きが増える量よりも消える量のほうが多くなっていると思われると思います。

ここで、少しボランティアベースでやっていたときの活動をご紹介します。平成三十(二〇一八)年七月には、現在、MIYASHITA PARK(令和二(二〇二〇)年にリニューアルされた複合商業施設。旧宮下公園)となっている場所にあったJR山手線高架下の落書きを、参加者十七人で消去しました。

その後、「シブヤ・アロープロジェクト」(災害発生時、区民と来街者が一時的に避難できる安全な場所(代々木競技場屋外敷地、明治神宮、青山学院大学)の位置を知らせる誘導案内を「矢印」のアートとして制作するプロジェクト。令和六(二〇二四)年十月時点

で十九の作品が登録」の壁画制作で、原画は別の方〔森本千絵 武蔵野美術大学客員教授〕なのですが、依頼を受けて私が壁画を描きました〔作品名「Break through your heart」、平成三十(二〇一八)年七月中旬に完成〕。一度落書きを消した場所も、そのままでは再び落書きをされてしまう恐れがあります。荒川区での活動の経験から、壁画があると落書きされにくい効果があると分かりましたので、渋谷区でも同じように壁画を描き、落書き防止コーティングをすることにしました。荒川区では、落書き防止コーティングの上から落書きをされたことはなかったのですが、渋谷区のJR山手線宇田川架道橋下の壁画は描いてから大体三日後に再び落書きをされてしまいました。しかし、落書き防止のコーティングをしてありましたので、一週間後ぐらいに落書き消しのイベントを実施し、それ以来壁画はきれいなままで残っております。

CLEAN & ARTの活動でターニングポイントになったのが、「渋谷をつなげる30人」〔渋谷区の未来像の実現に向けて、区内の企業・行政・NPO・市民の三十名が参加し、「つながり」を深めながら課題達成のための活動を立案・実行する企画〕に参加したことです。これは、渋谷区内の企業・行政・NPOなど三十名が参加し、社会課題解決のための活動を半年間立案・実行する、まちづくりのプロジェクトです。

この第三期目のプロジェクト〔平成三十(二〇一八)年六月〜平成三十一(二〇一九)年三月まで〕で、東急不動産株式会社(東急株式会社傘下の事業会社)の伊藤秀俊さん、京王電鉄(京王電鉄株式会社)の大淵鮎里さん、株式会社B E A M Sの中村尚史さん、B O S C H(ボッシュ株式会社)の室井泰葉さん、地域新聞『恵比寿新聞』の高橋賢次さん、渋谷区環境政策課の丸山陽子さんとともに「渋谷の落書き問題の新しい解決方法とは?」というセッションを行ない、私がチームリーダーとなって活動を進めました。その中で、落書き問題のステークホルダー(企業等の利害関係者)を集めたオープンセッションも平成三十(二〇一八)年十一月七日に行ないました。セッションには、地域で一生懸命



【写真4】 マツモトキヨシ渋谷Part1
店横の壁画
(令和2年11月25日、傍嶋賢氏提供)

落書き問題に取り組む「まち」の人や、以前落書きをしたこともあるアーティストなどいろいろな立場の人を集め、落書きが抱える問題や、落書きのアート、文化としての側面などについて、多様な意見が交わされました。

様々な意見の中には、「落書きを消す活動に用いる活動着があつたほうがよいのではないか」というものがあり、BEAMSさんの協力でビブスをつくりました。渋谷で活動するということで、恰好良くて目立つファッションをコンセプトに、白を基調としたデザインとしました。白を選びましたのは、どんどん汚れがついて活動の遍歴が残るという意味もあります。

また、BOSCHと共同してBOSCH製の工具を用いた落書き消去イベントを実施するなど、いろいろな企業とコラボすることで、企業の落書きへの関心を高めるといって取り組みもしております。

渋谷における芸術活動の展開

絵を描く事業としては、令和二(二〇二〇)年十一月九日から十五日にかけて開催された「渋谷芸術祭」(毎年秋季にアートを通して都市と都市、人と人、過去と今、今と未来をつなげることを目指す文化事業。<https://shibuyartscramble.tokyo/>)において、マツモトキヨシ渋谷Part1店(東京都渋谷区宇田川町二二三)横に描いた壁画があります。ボランティアを集めて落書きを消去した後に、みんなで一緒に協力して、SDGsの十七色のカラーをランダムに塗って製作しました。落書き防止のコーティングもしたので、落書きをされてもすぐ落ちるようになっていきます【写真4】。



【写真5】 都営バス渋谷営業所の壁画
(令和4年11月7日、傍嶋賢氏提供)

令和四(二〇二二)年四月からは、インクルーシブアート〔障がいの有無、年齢や性別、国籍などに関わらず、誰でも参加できる芸術活動〕の壁画製作も行ないました。きっかけは、渋谷区の恵比寿駅と渋谷駅の間にある、都営バス渋谷営業所に百メートル近い大きな壁があり、二十年ほど落書きに困っていて、都や区の方に何とかならないかというお声をいただいたことにあります。そこで、公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京〔芸術文化の創造・発信を行なう機構〕という文化助成団体や渋谷区から補助金を得て、渋谷区障害者団体連合会〔渋谷区内に住む身体・知的・精神の障がい者二十一団体で組織された連合会〕とも協力をしながら、障がいのある方とない方が共同して壁画を製作するプロジェクトを行ないました。この取り組みでは、単に私が壁画を描くのではなく、いろいろな方々が関わって一つの作品をつくるということをコンセプトにしています。障がい者施設にも伺い、百三十名の方にホワイトボードを渡して、そこにタングラムというカラフルな図形七個を使って自分の作りたい形を自由に組み合わせ、原画をつくって

もらいました。そして、十月一、二日の二日間、延べ百名の方に現地に来ていただいて、その原画をもとに色を塗るという作業をしました。現地でも、養生テープを貼って囲いをつくり、その中をSDGsの好きな色で塗っていくという作業をしましたので、およそ二百三十名が原画制作に参加したことになります【写真5】。完成からもう一年以上経っているのですが、それ以来一度も落書きをされていませんので、やはり壁画の持つ力はとても強いと思います。

海外の事例

そのほか、海外の事例についてもいくつか紹介したいと思います。コロナ前の



【写真6】 クイーンエリザベスホール
(令和2年1月25日、傍嶋賢氏提供)



【写真7】 リークストリートトンネル
(令和2年1月25日、傍嶋賢氏提供)

令和二(二〇二〇)年一月にロンドンを訪れ、いろいろな場所に行きました。たとえば、サウスバンク [Southbank, ロンドンのテムズ川沿いにある地域] というエリアです。ここは少し特殊なエリアで、**【写真6】**にあるように、上部にクイーンエリザベスホール [Southbank Centre Queen Elizabeth Hall (QEH)・昭和四十二(一九六七)年にエリザベス二世によって設立] という由緒正しいホールがある一方、下部にはスケーターがいたりグラフィティを描くエリア(地下備置き場、Undercroft)があったりする場所です。これが平成二十六(二〇一三)年ぐらいに取り壊しになるという話があったのですが、スケーターが署名運動で一万四千人の署名を集めまして、その署名された紙を持ってスケボーでロンドン市役所に向かい、ここはスケーターとグラフィティの場所であるという許可を取りに行ったという、とても不思議な場所です。この事例を通じて、グラフィティの考え方や文化の捉え方が違うことや、イリーガルなものをリーガルにしてしまうという点が大変面白いと思いました。当時、そこで会った高校生くらいのスケーター少年とは、イン

スタグラム(スマートフォン等で撮影した写真を共有するSNSの一つ)で今も交流が続いております。

そのほかに、ロンドンの中心市街地(ランベス自治区、London Borough of Lambeth)にあるリークストリートトンネル [Leake Street Tunnel] という場所にも行きました**【写真7】**。ここは、通称バンクシートトンネルと呼ばれていて、バンクシー(イギリスを中心に許可なく活動する覆面芸術家)が世界中のストリートアーティストを集めてトンネルに絵を描くというプログラムを二〇〇〇年代に行ないました。これもロンド



【写真8】 ショーディッチ
(令和2年1月25日、傍嶋賢氏提供)



【写真9】 カムデン
(令和2年1月25日、傍嶋賢氏提供)

ン市の交通局に許可を取って、リーガルに描くエリアをつくったということです。

このように、落書きを消すのではなく、逆に「まち」の中にフリーに描けるエリアがあるというのは、どのような仕組みでできるのだろうか、という思いで調査をしていたことを思い出します。去年(令和五(二〇二三)年)もロンドンに行ったのですが、実際にそこで絵を描くワークショップをしたり、少年がスプレーを持って描いていたっていました。また、ここは観光地になっていますので、自転車で見回るといったことも行なわれていました。

ショーディッチ [Shoreditch: ロンドン中心部の東側にある地区] という場所にも、ストリートアートを巡るツアーがあり、とても人気のエリアとなっています。その中にある公園は、あたり前のように落書きをしている人がいるという謎の空間です【写真8】。こうしてみると、ロンドンは落書きが多いと思われるかもしれませんが、平成二十四(二〇一二)

年のロンドンオリンピックの際に「まち」を綺麗にしたこともあり、落書きがないエリアもたくさんあります。

カムデン [London Borough of Camden. ロンドン北西部に位置する自治区] という場所は、エリアごとに特徴があつて、落書きもあれば、許可を得て描かれたストリートアートもあります【写真9】。

ちなみに、バンクシーの行為自体は違法です。しかし、描かれた建造物が民間の所有者のものであった場合、絵を消す、消さないというのは所有者の判断となります。ですから、アパートやビルのオーナーは、バンクシーの絵を見



【写真10】パリ13区(ピュトカイ)における落書き消し作業
(令和4年9月2日、傍嶋賢氏提供)

つけると、上から落書きされないように周りに囲いを作ります。このように、その絵自体が資産になることもあり、また観光地にもなるのですから、不思議なものです。

また、パリに行ったときには、私が落書きを消したこともあります。パリ、ニューヨーク、ロンドンでは、都市によって落書きの内容に違いがあります。パリは、どちらかというと図像が多かったイメージがあります。「まち」を見て回ると落書きが多く、この「まち」は「落書きに理解があるまちである」と思われがちなのですが、実際には「自分の家が落書きされてしまい困っている」といわれましたので、道具を買ってきて落書き消しの作業を行いました【写真10】。

そして、去年(令和五(二〇二三)年)は、ニューヨークで美容室を経営されている日本人の方がとても困っているということでしたので、落書きを消しました。この美容室があるエリアも、いわゆるダウンタウンで、とても落書きが多い地域でした。観光客としては「ストリートアートのまちだ」「みんな寛容だな」と思うわけですが、渋谷と同じで、話を聞くと、やはり地域の皆さんはとても困っています。美容室のある建物も、以前は壁にハートの絵が描かれていたのですが、建物のオーナーが「真っ白にしろ」といって、壁を真っ白にしました。しかし、絵がなくなった途端、落書きが増えてしまいました。その後、以前ハートの絵を描いた人から美容室のオーナーに連絡があり、私が落書きを消した後に、改めて壁画を描いてくれました。その後は、おそらく落書き

をされることはなくなっただけだと思います。

以上が私からのお話となります。私の場合は、ささいなきっかけから社会課題に向き合い、いかに自分の専門性を社会に生かしていくのかということが課題でした。そのためには、探求心や情熱を持って取り組むことも重要です。しかし、それだけではなかなか継続できないので、ビジネスやお金の面をいかにクリアしていくのかということも、とても重要になります。その点で、CLEAN & ARTは、それぞれお金が得意な人であったり、現場の作業が得意であったり、ウェブの作業が得意であったりというチームで支え合って取り組んでいますので、順調に事業を展開することができているのだと思います。

ご清聴ありがとうございました。